

NEWS RELEASE

報道関係各位

2021年12月15日

(即日解禁)

女優 草刈民代の心に響いた『マリー・ロージー展』本日より日本初開催！

「近代絵画の父」ポール・セザンヌを高祖父に持つフランスの画家、マリー・ロージーの日本初となる展覧会「マリー・ロージー展～予測不可能な画家・終わりのない変革～」が幕を開けた。

マリー・ロージーは、1961年、フランス・マルセイユ生まれ。セザンヌから数えると5代目になるが、マリーがセザンヌのDNAを色濃く受け継いだと言われている。小学校の美術教師としても、30年に渡り子供の成長に果たす美術教育のあり方を研究してきた。

マリー・ロージーの画に感銘を受けたという、元バレリーナで女優の草刈民代は「すごい発想の人ですよ。今まで見たことがない、というのが第一印象です」と、熱く語る。抽象的な中からも、この画を見て読み解いていくことが、絵画を鑑賞することなのだ」と知り「ハッとします。強烈さを感じました」と言う。

一見不思議な画が並ぶ。疾走感が強く、画面の中で時空を超えて物事が進んでいるようにも見えるし、反対に止まっているものもある。そこには命の短さ、時の流れが描かれているのだ。そうかと思えば、美しい少女の上に落書きのような画が重なる。この線の意味は何なのか、空想が止まらない。1枚の画から、どこまでも可能性が広がっていく。凝り固まった感性で見るのではなく、頭を揉みほぐして、柔らかくしてから見るのが良さそうだ。

草刈は、1枚の猫の画の前で足を止めた。「人々がサッカーに熱狂している。そこで世の中とは関係なく凛としている姿から、感じるものがありますね」と、作者が発するメッセージを受け止める。



相反するものを1つの画面に入れたいというのが、マリーの考えだという。この時代の画家として、自分の作品を通して、社会に貢献したい、問題意識を投げかけたい。画に言葉はないけれど、感じて、想像してもらいたい、という思いが、どの作品にも必ず含まれている。

子供が見れば、豊かな発想で、意外な感想を教えてくれるかもしれない。多様なモチーフを描いた、原画約70点が公開されている。クリスマスの時期、幻想的な世界に触れてみてはいかがだろうか。

高祖父ポール・セザンヌの魂を継承する

『マリー・ロージー展』～予測不可能な画家・終わりのない変革～

会場：代官山ヒルサイドフォーラム

住所：東京都渋谷区猿楽町18-8 ヒルサイドテラスF棟

会期：2021年12月15日(水)～12月26日(日) 11:00～19:00 (最終入場 18:30)

入場料：一般 500円/大学生以下無料

アクセス：東急東横線 [代官山駅] 3分、日比谷線 [中目黒駅] 7分、JR [恵比寿駅] 10分

公式ホームページ <http://www.art-obsession.co.jp/691>

撮影：福岡諒祠 (GEKKO)

本件に関するお問い合わせ(03-3407-8105)

キョードーメディアス 雲林院 佐藤 medias1@kyodotokyo.com

NEWS RELEASE

報道関係各位

2021年12月15日

(即日解禁)

付帯するアザー写真

写真：草刈民代・出川博一（アートオブセッション）

